



手をつなぐとも

等友

S 60・10・1 生

〒111-0041
台東区元浅草
2-10-17
3841-2844
浄土真宗
勝龍山
等覚寺
住職
朝倉 馨

平成25年9月
第99号

盂蘭盆会法要 (等覚寺本堂にて)

生きてる間はお医者さん
死んだらお寺のお坊さん
こんな大きな間違いはない
仏法は生きるためのもの

撰取不捨のご本願を信じ、お念仏を称えれば浄土往生の決定される私共にとって最も大切なことは、死ぬまで現生でどう生かしめられるかということではないでしょうか。

私共は一年一年年老いてゆく身ですが、心構えはできていますか。その時になって考えるのでは遅いですよ。あなたはいつか家族の誰かと別れねばなりません。覚悟はできていますか。あなたは、いつかきつと何らかの疾病と付き合ねばなりません。心の用意はできていますか。その時に考えるのでは遅いのですよ。釈尊をはじめ、歴代の善知識たちは、私たちのためにその生き方を説かれたのです。葬式とか墓とか仏壇の形式について説かれたわけではありません。

法蔵館 「心に残る仏教のことば」より

住職から一言

皆さんのあたたかい心に包まれて九十九歳となりました。

今は家族の看護を受ける日々。大変な面倒をかけ、今一度お檀家さんお一人お一人のご恩を思い出しています。心に浮かぶのはお礼の言葉だけです。

お元気にナムアミダブツと長生きしてください。

九十九歳ボケ老住職

住職は現在九十九歳で年齢なりに元気にしておりますが、七月のお盆前、歩いているときにバランスを崩し、背中を壁に強打してしまいました。その結果圧迫骨折を起こしてしまい、いまは療養中です。主治医によると痛みが相当あり、本人にとって寝返りひとつ出来ないくらいのことですが、がんばって家族と一緒に食卓について椅子に座って食事をとっています。私たち家族も、次回の報恩講にはみなさんに直接住職がご挨拶できるようにしたいと思ってサポートしております。(翔)



孟蘭盆会の「報告

平成二十五年七月十五日に等覚寺本堂にて孟蘭盆会（うらばんえ）が勤まりました。当日は午前午後で初盆の方とそれ以外の方で分けさせていただきましたがおかげさまでどちらも多くの方にいらっしゃっていただき、満堂でのお勤めをすることができました。天気にも恵まれご先祖さまの教えに再び遇ういい機会となれたのではないでしょう。か。
また次回もみなさまぜひお気軽にお参りください。
せっかくですので、副住職（釋 創龍）の法話をこちらにもご紹介させていただきます。

○お盆って？

お盆というのは正式には孟蘭盆（うらばん）といいまして、難しい字を書きます。この盆だけとお盆と呼んでるわけですね。そもそものは仏教の始まったインドの昔の言葉、サンスクリット語（凡語）でウラバーナという言葉がございました。ウラバーナという言葉が中国に伝わり漢字にあてはめたのがこの言葉なんです。です。で、漢字自体には意味はございません。ではこの言葉はどのような意味なのかというと、逆さ吊りの苦しみを表す言葉なんだそうです。逆さ吊りの苦しみというとても非常にまあ物騒な言葉ですけれども、今日お読みした表白（ひょうびやく）の中にも目連（もくれん）という名前が聞こえたかもしれませんが、お釈迦様の弟子の一人で、この方は神通力を持っている方でした。あるとき亡き母が向こうの世界でどうしてるか

とその神通力をもって見たそうです。するとお母さまは餓鬼道という世界に落ちて、餓鬼として逆さ吊りにされ苦しんでおり、これは大変だということ、なんとか助けようと食べ物や水やいろんなものを届けようとしたんですが、お母さまの口に運ぶす前ですべて炎になって燃え尽きてしまいました。目連はお釈迦さまにどうすればいいかとお相談したそうなんです。するとお釈迦さまは、雨期の明ける安居（あんご）の時期、今でいう七月十五日に、修行から帰ってくる僧侶たちを集め、仏法僧の三宝に対する供養をみんなでしなさいと、そうすることによってお母さまは救われるでしょうと言われ、その通りにはお母さまは救われました。それが書かれているのが盂蘭盆経というお経です。ここから来ているのがお盆の由来です。日本におきましては、この仏教による由来とともに、日本の

古来から伝わる霊信仰・民俗信仰的なものと混ざって今日のお盆があると言われています。

※三宝（さんぼう）

・ 仏教で一番大切なもの

・ 仏 仏さま

・ 法 教え

・ 僧 僧伽（さんが）一緒に教えを

聞く集まり

みなさんでお勤め前に読む三帰依文はこの三宝に帰依しますという宣言です



それはどのようなものかと言うと、よく十三日から十五日の間の三日間だけ地獄のふたが開いて、ご先祖が帰ってこられる。そのご先祖が迷わないように迎え火・送り火を焚きます。またはキュウリで作ったお馬さんとかナスで作った牛さんを飾ります。これは来る時には馬に乗って早く来てもらって、帰りは牛でゆっくり帰ってもらうという意味です。これらは仏教ではなく、日本古来からの民俗信仰からできた習慣なんです。これが混ざって今日のお盆があるということになります。よくみなさんに浄土真宗ではお盆ではお飾りは必要ですかって聞かれますが、浄土真宗の場合は一切そういうったお飾りまたは提灯などはお飾りしなくて結構です。同様に迎え火送り火も焚かなくて結構です。三日間だけ地獄のふたが開くといいますが、本当にご先祖さまは地獄にいるのでしょうか。また、盂蘭

盆経では餓鬼道（餓鬼道とは六道輪廻の一つで地獄の一步手前の迷いの世界のこと。六道・・天界、人間界、修羅、畜生、餓鬼、地獄）にいと書かれています。はたしてご先祖様はそういう苦しみの世界にいるのかどうかということを一つ考えなければいけません。そして迷いの存在として、火をこちらで焚かなければ戻ってこれないのかということ、お馬さんで早く帰ってきてもほしいけど帰りは牛さんでゆっくり帰ってほしいということ、今で言うと言は新幹線だけど帰りは各駅停車みたいなものですね。行きも帰りも新幹線で送ってあげた方が、なるべくこちらにゆっくりいれるんじゃないかと私自身は考えてしまうんですが（笑）要は、こちらの都合で迎えて送ってるんじゃないかということですね。そういう側面があるんじゃないかと私自身疑問に思っていました。

○日本人と死

古来から私たち日本人は死や死者を忌み嫌ってました。なるべく死や死者を自分から遠ざけようと、それこそ棺に釘打ちをしたり茶碗を割ってみたり棺をぐるぐる回して目を回させたり足を折ったりすることもありました。今でも葬儀の後に清め塩を配ったりですとか、あい箸・あいばさみといって、一つのお骨を二人で一緒につまんだりします。これも死のけがれがどちらか一方にこないようにという意味合いです。そういった習慣が現在でも続いているように、日本人は極端に死を自分から遠ざけようとしてきました。今でも新興宗教なんかでは、ご先祖供養が足りないから悪いことが起こってるんだとか、今の自分に起きている悪いことをあたかもご先祖のせいとしている。本当にこれはお釈迦様の説かれた仏教とはまったく異なることなんです。生き

ている人間の都合の悪いことはすべて見えないもののせいにして、都合のいいことはすべて自分のおかげとする。そういう私たちのあり方がここに見えるんじゃないでしょうか。



○浄土真宗におけるお盆と目連

では浄土真宗においてお盆はどう迎えればいいのかということですが、近しい人との死別というのは、生きてる私たちにとってみますと、いただいた命についてあらためて見つめなおす大切なご縁となります。そういう意味で、先ほどの清め塩などをしていただけでなく、ぜひ近しい方を亡くした大切なその時こそ、悲しいから早く忘れたいとかそういうことだけするのではなくて、そのことを見つめて、そのことを通して、死を我がこととしていく、死を自分のこととして受け止め、今の生、いのちの部分をしっかりと輝いたものとしていく。その機縁が、近しい方との死別であり、またはお盆やお彼岸のありかたなんじゃないかなと思っ

ではなぜ目連はお母さまを逆さ吊りと見たのかということなんですが、お母さまは

本当は餓鬼道に吊るされていなかったのではないでしようか。実際は、日々迷ったり苦しんだりしている私たちが、自己都合でなんでも考えてしまっている私たちが勝手に、お母さまが逆さ吊りになっているかのように見えてしまったんじゃないかと思うんですね。要は私たちの煩惱にまみれた考え方ですね、死者を忌み嫌ってきたという歴史もありますから、私たちがそのように見ってしまったんじゃないかということなんです。本当はそんなことはなかったし、お釈迦様も実はそのことにお気づきになっただからこそ、目連に対してそういう自分の在り方を気付きなさいということで、仏法僧に対してあらためて帰依しなさい、あらためて考えて自分を見つめなおしなさいということと言ったんじゃないかなと私は思うわけです。つまり、目連が神通力を使って餓鬼道に落ちていたお母さまを救ったと

いう単純な物語では決してなくて、その話の中には日々の私たちの在り方、亡き人を時に都合良く、時に都合悪くとらえてしまう私たち、そういう姿をこの盂蘭盆経の中で教えられてるんじゃないでしょうか。そしてそのことに気づいてくれと願っておられるのが本堂の真ん中にいらっしゃる阿弥陀如来さんなのです。南無阿弥陀仏という六字の姿をもって私たちに呼びかけて下さっている。それが浄土真宗の本当に大切な教えでございます。今日弟が最後に御文（おふみ）というものを読みましたが、この御文の中では、蓮如上人からの教えとして、南無阿弥陀仏という六字の姿は、我々が極楽浄土に往生する姿をあらわしたものであると書かれていました。決して南無阿弥陀仏は呪文ではありません。よくテレビのコントの中で、なまんだぶなまんだ

ぶってなにか悪く言うように使いますが、本来は南無阿弥陀仏というのは、私たちが平等に救われていく姿をあらわすものであります。つまり私たちが常になまんだぶつと手を合わせるのは、常に救ってくれようと願われている阿弥陀如来さんやご先祖さまに對して感謝する気持ちをあらわしているのです。そういったことをぜひ一度お考えいただきたいと思ひましてお話をさせていただきました。

○お内仏（お仏壇）とお寺

みなさまのご自宅にもいろんな形のお仏壇があるかと思ひます。そもそもお仏壇というのは、亡くなった方のお家ではございません。よくそのように考えられています。が本来はそうではなくて、お寺の本堂内の須弥壇（しゅみだん）と呼ばれるお浄土

をかたどったもののミニチュア版がお仏壇なのです。ですから亡き人がお仏壇に住んでいるから手を合わせるのではなくて、私たちを救って下さろうとする阿弥陀如来さんやご先祖さまを常に思い描き、そしてまた日々の自分の在り方を見つめなおせるように手を合わせるのがお仏壇であります。そういったものが生活空間の中にあるという素晴らしさをこれを機縁に考えていただきたいなと思ってお話しさせていただきました。

そして最後になります。お寺というのも決して亡き人のためにだけあるのではなくて、もしくは死んだあとにお世話になる場所では決してございません。むしろ、日々いろんなことに悩んだり苦しんだり煩惱を抱えたりしている私たちのために、あらためて教えを聞いていく、そして教えを聞いて日々またあらたに生

きていく力、または生きる意義を見つけ力、または生きる意義を見つけていただく、そういう場所がお寺であります。ですから今日もたくさんの方が来ていただいて本当にありがたいことでございますし、お盆以外にも年に四回合同法要がございますので、今後もお気軽に足をお運びになって私たちと一緒に、生まれてきた理由や生きていく意義・本当のよろこびというのを見つけていっていただきたいなと思います。



お布施の意味

みなさん、突然ですがお布施って言われたらどのようなことを想像しますか？

一般的にはお寺で法事を勤めるときや通夜葬儀の際に包むことが多いと思います。ですから僧侶がお経を勤めることへのお礼って思っただけの方が多いかもしれません。しかし実はそうではないんです。

そもそもお布施という言葉はサンスクリット語の「ダーナ」からきています。檀那(だんな)寺とか、檀家(だんか)という言葉も、ここからきていますが、「ダーナ」とは「あまねくほどこす」という意味で仏教の行の一つでした。

布施には、法施(ほうせ)、財施(ざいせ)、無畏施(むいせ)の三つがあります。法施とは、人が正しい生き方をするためではなくてはならない仏法を説き、無形の精神的な

ほどこしをするもので、これは僧侶のつとめです。この法施にたいして、感謝の気持ちを、金品で表して、お寺へほどこすことを財施といいます。無畏施とは、不安や畏(おそ)れを抱いている人にたいして、安心のほどこしをし、取り除くことです。現在のお布施はこのうちの財施のことを主に指すようになりました。つまりお布施というのは、僧侶に対して渡すものではなくて、お寺のご本尊にお供えするものなのです。ですので、ご法事の際はお布施は始まる前にお預けください。ご本尊にお供えし、お勤めさせていただきまます。また、どのように包めばいいか・いくら包めばいいのか等わからないことがあれば、お気軽にお問い合わせてください。直接聞くのはお寺さんに失礼ということをよくお聞きしますがそんなことはありません。仏事のことですから何でもご相談ください。

法事の時って何を持っていけばいいんだろう？

○必要なもの

・お布施

・お花代（本堂にお飾りする

お花代で、一万円の実費）

・供物

○ご希望によってお持ちください

・過去帳や位牌

・遺影（小さいもの）

※お寺へお包みいただく表書きは全て「布施」と書いていただければ結構です。浄土真宗の場合は「読経料」「ご霊前」という言葉は用いません。

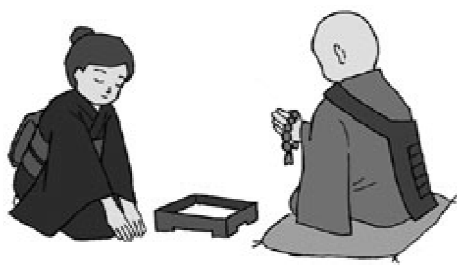
ご披露

等友へのご懇志

小笠原様 栗本様 高橋様 山本様

（順不同）

いつもご支援いただきまして、誠にありがとうございました。また、他にも多数の方から等友へのご支援をいただいております。（申し訳ございませんが、お名前には漏れがあるかと存じます。おっしゃっていたければ次号以降に順次ご紹介させていただきます）



編集後記



こんにちは、釋翔雲（弟・翔）です。最近は一
異常に暑い日が続いていますね。外に出ると肌が
ヒリヒリ焼けるような感じですよ。家の中でも室温
が高いと熱中症になってしまうようなのでぜひ気
を付けてください！

さて、今回は住職のことをお伝えさせていただ
きました。やはり九十九歳にもなると、少しづつ
ただけでも骨が折れてしまうんですね。最初は
動くたびに痛がっていたのでその姿を見ていると
本当につらいんだろかなと感じていました。

圧迫骨折は年齢に関係なく起こるそうです。折っ
てしまったら他の部分と違って、ギプスをするで
もなく絶対安静で寝たまましばらく過ごして治療
するそうですね。けれど住職の場合は高齢という
こともあるので医師からは寝たきりにならないよ
うに、動けるようだったら少しでも動かすよう指

示されたので、家族で協力してなるべく住職が
体を動かせるようにサポートしています。たぶ
ん住職にしてみれば、痛いのにつらい思いをさ
せてと内心想ってるかもしれませんが（苦笑）
痛がる姿を見るといろいろと心配にもなりま
すが、食事の時はきちんと食卓で椅子に座って
ごはんを食べているので、その姿を見ると少し
安心します。ここだけの話、夜は少しだけお酒
も飲んでいるですよ（笑）ケガをしてから1カ
月が経ち、当初よりもだいぶ回復して動きもよ
くなっているように思います。引き続き家族一
丸となって治療していきたいと思っていますの
で、これからも今までどおりのご支援をよろし
くお願いします！

平成二十五年行事予定

九月二十日～

二十六日

秋のお彼岸

十月五日(土)

いのちのふれあい

ゼミナール

十月十四日・十五日

等友旅行会

十月二十七(日)

報恩講

◎みなさまお誘い合わせの上、

お気軽にご参加ください。

(※ゼミナールについては別紙ご案内をご覧ください)

平成二十五年年回表

一周忌	平成二十四年
三回忌	平成二十三年
七回忌	平成十九年
十三回忌	平成十三年
十七回忌	平成九年
二十三回忌	平成三年
二十七回忌	昭和六十二年
三十三回忌	昭和五十六年
三十七回忌	昭和五十二年
四十三回忌	昭和四十六年
四十七回忌	昭和四十二年
五十回忌	昭和三十九年
七十回忌	昭和十九年
百回忌	大正三年